六十四雲

十四

哥を名ごきわ

□v. 19□

PL788
.4
.G4
1654
vol. 19
copy 1
Asian
Japan
Case

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

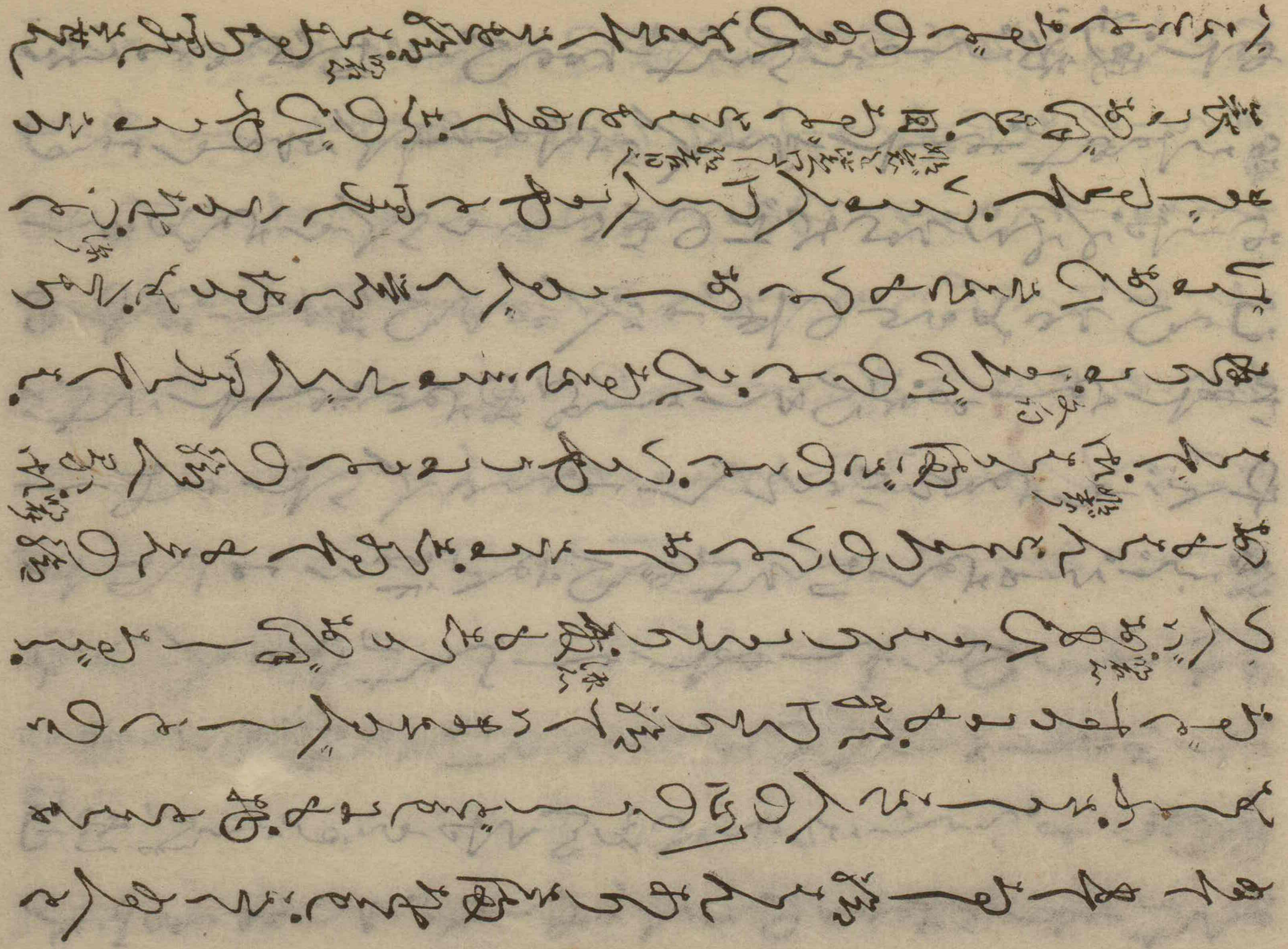
法民卅七より卅一七の秋までのるを
久々に成りまくに河づらのすまねいとぐ心ぼそさ
まさりてういのそらなる心ちのこしけ。おし
くすを。君も程くてはえすぐさじ。彼ちるさ和る
しひこちるとすくめぬへど。うしさ和ぬ間く。うろ
こそてんも御りなき心ちすべきを。いるいひてか
などいふやうにしひこぶれたり。さしが此ワガ君を。
よくてのこいびんなきことなり。しふうろあれどか
こしけるし。愛いるこさをきてつるにゆしぐるを。
しぶしこうしはさきて。ちら海ぎのことなども。人
しれぬさ海ならずしれさんとなんなまふと。まゐん
やうなこしひ給。さぬすんとなもひけうこ

とあれど、いとゞむねつぶれぬ。おしあてやむごと
なきはるまでなされ給ひ。人のもりきこんことは
中くまやつくろひがくくあげされんとて、ちうち
ごくぶひとうこゝろうりてはあれどうもろうやも
うぬうるまやあらどいかがうらうひ給そうしこゝは
とんぬれど、うら人もるさがさすくしく見
ゆうまうは。前斎宮(せんさいぐう)のおほんあるひもあらし給ふる。
こそおれがちはあわりひさしもめれば、まして
うこまくこえならけなめう指をなろうてはおひたなう
まじさこ心ざん人るあんと、秋好の中宮様のおほんやう
あう、さもくろう給。げまいらせんた、うぐろあまい乃

ことに。さぶまりぬべきまかと。つてまもほの罪し。
清心（源好色ノ）のなぐりなくしげまりたまへるも。なぼろけ乃
れすくせまもあらず。人（紫）のれあるさ後も。こゝらしれ
中ましぐれぬへるまこそいと。しひやられて。かぎ
なしぬ人のなしびきしゆべきなぼしまもあらぬを。
さすがまたちいでく。人もめぎ後しとなぼしことや
あらん。ワが身いとてもかくてもおなじこと。おひ
さ紀とをき人（姫志）のれうへも。つねまはかのれ（紫ノ）こゝろ
うるべきまこそあめれ。さりとならば。げまかう
なまごろなきほどまや。ゆづり罪ましとしふ。又
てともなちてうしろめるかんこと。つれぐも

なぐさむるなくてはいかゞあらしろすべからん。
なるゝつけてかゝる面さられ（源ノ）れたちよりもおろん
などさ面ぐおもひこゞろくまも。ものうさこと
かぎりなし。おまぶさこしひやつまふさ人まで。（尾云何）ぶちさ
なし。こまらざらんことは。いとむるいるかりぬ。
それどつねは此れたあるよりるべからんことをそ
むもめ。おさくおぼしてのまふことはおしゞ
たゞうちられこさそしてけしまり給てよ。毋りる
かるこそ。こゝかどのれこも。さいくまかりすめれ。この
（源）おとゞの君の世るふろなきれ有様なるゞ。世る
けりへ給ハ。古大納言の。い面ひとこゞぶこなりおとり

ぬて。更衣（ふい）だらしと。いはれたまひしけぢめよこそ
おもすめれ。おしてこそ人はなずらへきこゆるも
おらず。又みそこちただのれけしといへど。なをさし
むかひこゝろをとりの所にハ。人もさひおさし。おやの
れもてなしもえひさしからぬ地なり。ましてこれハ
やんごとなきれうるゞまゝ。うゝ人いでもれし
給ちぐ。こよなくけれぬひなん。程くまつけて。
おやまもひとかしもそうしづれぬる人こそや
がておさしめられぬもじめとはなれ。れもう面さ
のほどもいうじきうろをいくすとも。うれ深山（三やま）
がれまてハなまのもへかあらん。こゞまゝを四九



ことはあるをいと哀にあぼゆれど、(非忘)忘のれこめるよりる
べきことをこそとねんずめれとともひきつれ
あんことおけられのあるもしさつれぐをも
けりこしひてあるぐさめあるひつるにいとぐ多いぎ
あきことをきへさりそへいうじう兄ゆべきことく
忘もあるぐめれともさるべきにやあぼしぬさ夜にて
三年りそめてさしぼのれ心ぢへのつまれがうこ
ひしうあぼしぬべき代うちるえこさゆかことは
よもあらじつゐにはとゑのこちぐしもし
にてもよそくにはひのかゝれまじらひしは
らんがやすくずもあべきれるどうちあきいく

すぐすほどる。志ちすまもなりぬ。雪わしれがちる。
心ぼそさまさりて。おやしくさ海ぐる。柚なまふ
べかりけるまかれとうちなげきてつゐよるとこれ
[illegible]をなぞつくろひつゝぬさり。雪うき薯しふり
河まるあしる。さしかるゆくささのとくのこうぞ
さひつゞけてれいもことるもしぢゝなすなりでね
などもきぬをみぎはのこほりなどこやアそ。志ろき
きぬどものなまくかるるにまるゝきて。なぞめこうやう
なぬいかしら河きうしろでなどかぎりなき人と
きてもともかうしておもすしめとこゐ。おけるな
こぶことかいもしひてかやうなるん日。ましていかる

おぼいかなりんとらうこげまうちなきて
雪(略)ふりきえ山のほいとれどもなをふきりへ
伝えしずしてどの給へばめれとうちなきて
ゆき(めぬと)まちきらしの山を都ひても心のうふ
伝えしめやいどいひなぐさむ此雪すくしとけて
(源)けうりぬへりれいそ(略心)まちきゆりまさすしむと
おもふことまうりむひうちつづれてひとやまを
なしずおぼせ我(まが)心なるとそおしめいなびまえんな
志ねてやいおぢきなるぐおぼゆれどうろぐ志き
やうなりとぞめてさひりへまて(姫宗)いとうのうしげまて
まへまねめへなをきを給ま(源心)をろりまはおもひがる

りけり人のすくをかれとおもほせ。これ書ようを
おふ寸れぐしおまそぎ（そてきイ）の程まで。ゆしくとめで
さくけしつきまこのほわりほどなど。いへばさら
なり。よその袖にしひやうん程の心のやうをしハかり
給ふ。いとこころぐるしかれば。うち久しの給あり。
（四名詞）なまりかく口おしきものほどなしずごゝ。もて
なし給ひてときゆり抱かしねんじあへぎうち
なくけたひ衣なりひめぎ君ハなる心もなくて此車ま
のんことをいそぎ給ふをうち取る。（四名）ちくぎみこ
かしいぐきいでぬへり。かゝことれと思ひいとうつ
くしうて。袖をさしへてのまこまへどひくを

いとじうぬぼして

（略）来とときふるぶ紫の松にひきつれいけり

本ごうさうげをうるべき。えもいひやらず。いとじう

なけば。（添ふ）さりや。おれくるしとぬぼして

（添）ぬひそめしねもふりければこけぐ雨の松に

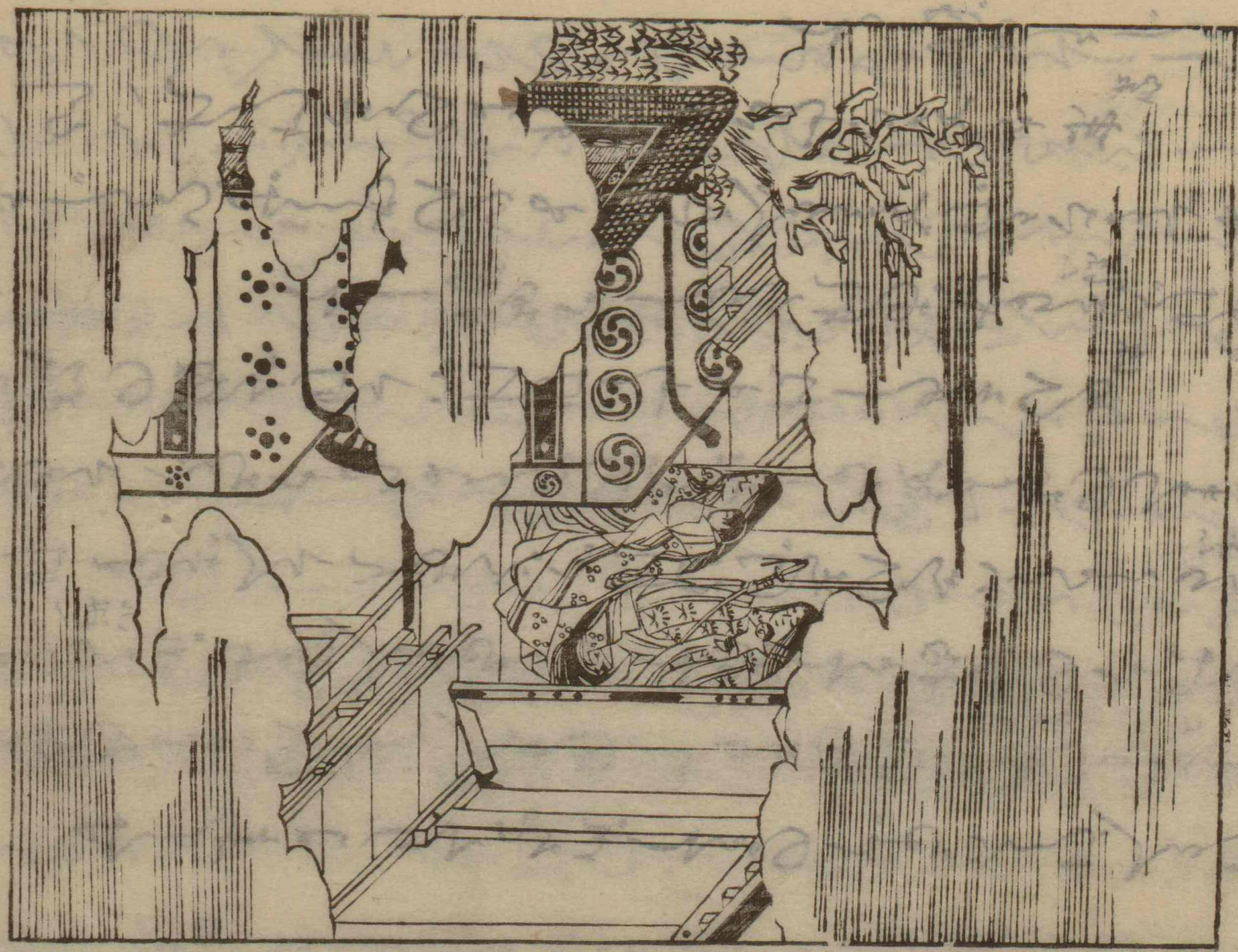
こまつのちとをなしべん。のざくにをとなぐさめ給。

（略ふ）さりことくはせひしげれど。えなんさへざるもけり。

めれとのかねとて。おてやうなう人ぐり。れさし。（法詞之）

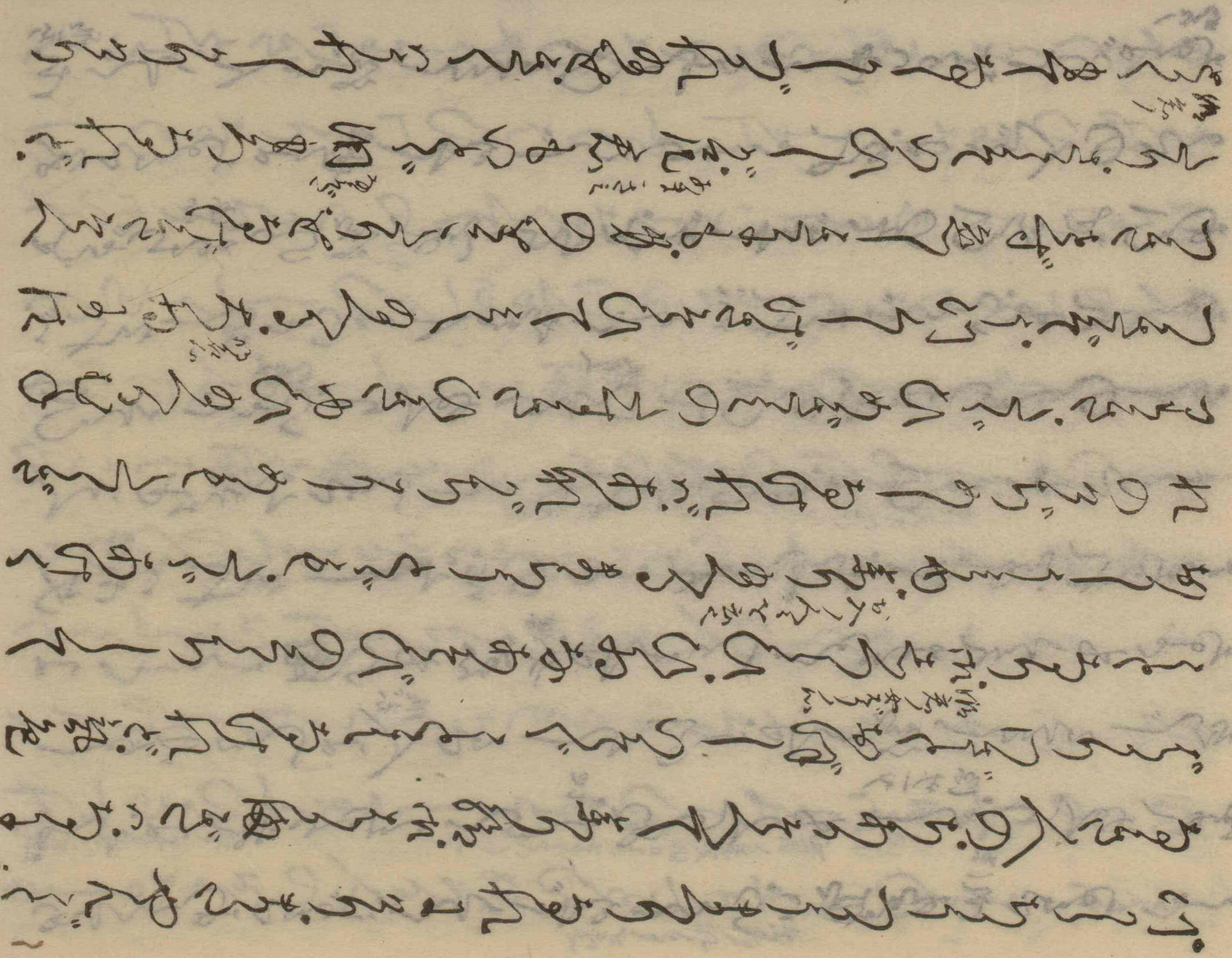
（尼児）おまがつやうの袖とりてのう。人ごまひにうろしき

ワクへ。ワしはなどのをそれをくりに来しす



[illegible]ちすぐらさまりつゝ人のうろぐるしさ成。いかり
つゝやうしむとおぼせ。くらうおりしつきて。此車
よすゝより。おれやうまけるひとなりとおちゝびぬ
ゝる心ちどもいとしたるくてやまじらんと
もひつれどよしおもてとことまきつゝをぬひて。
ちいさきはでうどぐもうひてげまさくのへさ
をあへり。めれとのつぼもまはよしのまゝどれく。
ふまあたれりをさきせぬへり。ひかぎいうちまてね
なまうり。いぐきおろされて。おきなどいさ結んず。
こゝろまてはらぐ物ありなどさしまへどやうしく
そめぐらしてぐくぐれえぬをまとめてらう

えげまおひそこぬへば、ぬれとめしのぞ、ちぐさめ
まぎらしきそこ給、山里のつれぐ、まして
いりまと見しやりはいとおしかれど、明菅おぼす
さ夜ましづきつくしまふは、ぬれあひこころちし
しぬふん、いりまぞや人のしふべさ、起ぞちまき
ことはこのつゐりまいでおもてとくちおしく
ぬぼさう、志ばしは人ぞもとめてなきなど志給し
かど、ぬぼりる心やすくおしき心ざ夜なれば、うへ
いとうくつきむつびきそこぬへれば、いとじうまの
ケしきもれえたりと見しかりこと、るすなくいぐつき
あつかひもてあぞひ、ぬれ、ぬれとも、ちむ

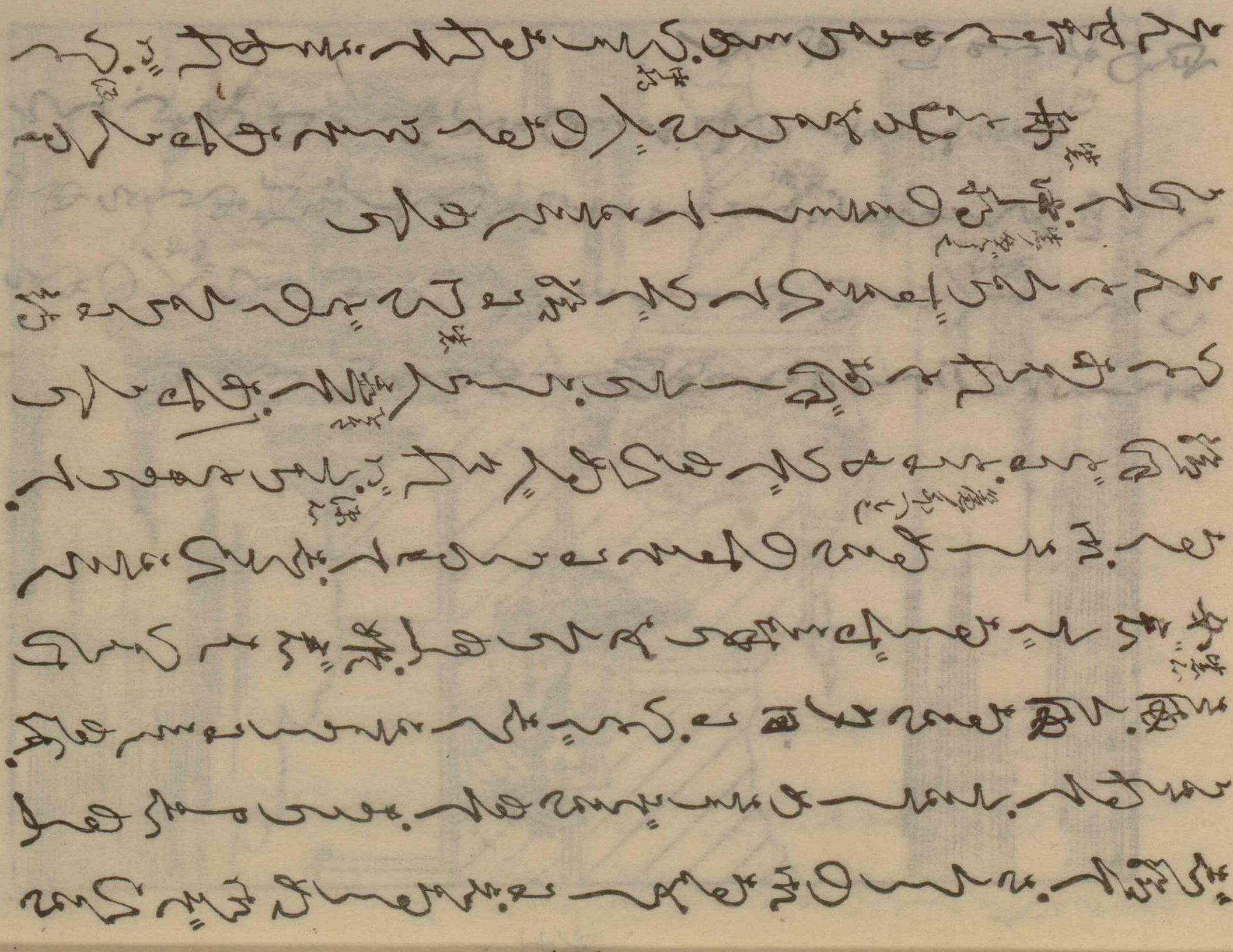


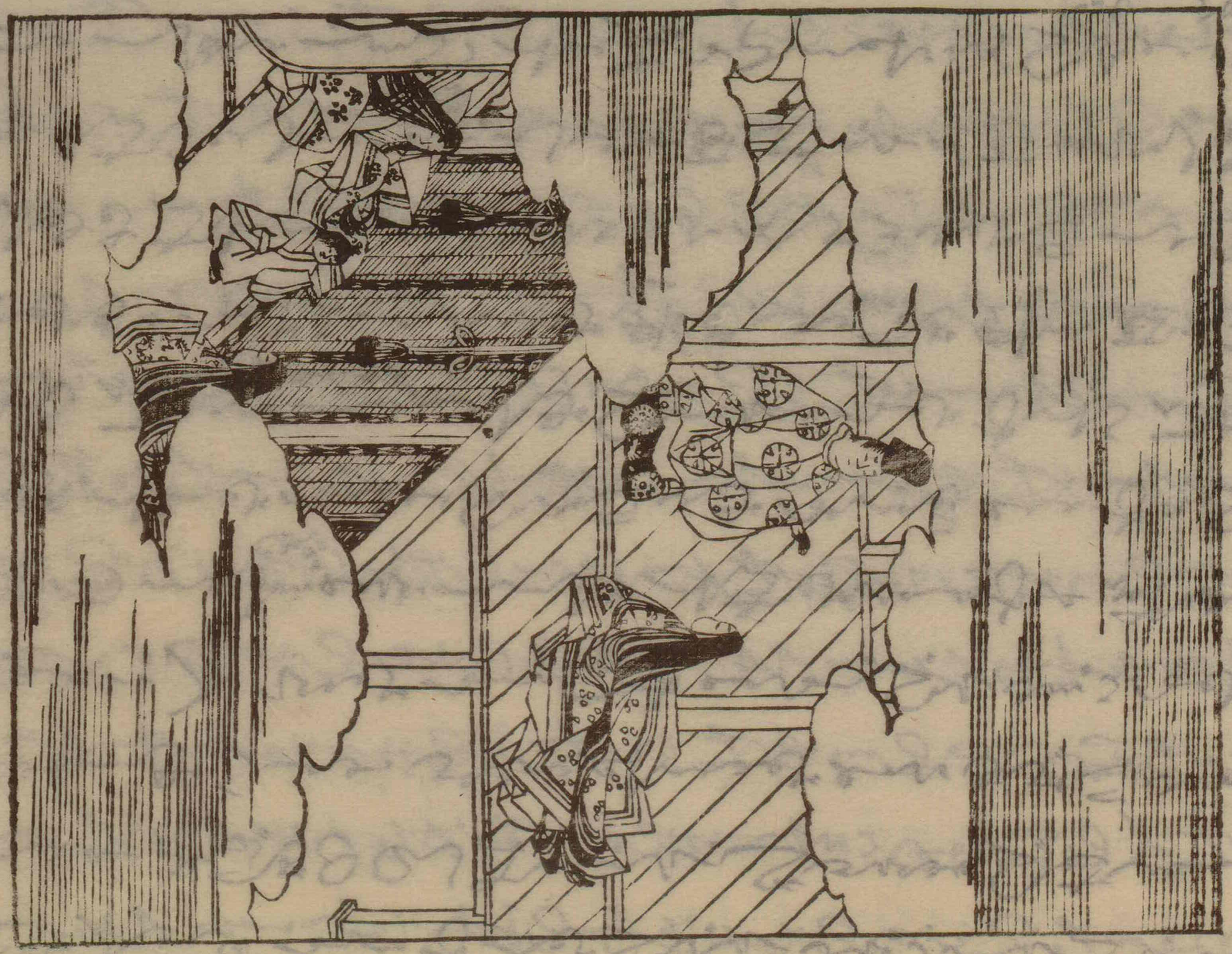
なまごとをかは中くとふひきそく給ちん。こゝに此（姫君ノ）
くるの人ぐにぬれとよりたじめて。世にあるさま
あひをさひいそぎてぞをくり罪給けり。まちどを（源心）
なるんも。いとぐされがよとせたんにいとおしかれば。
さしのうちに志のびて（大井人）ひたりぬへり。いとぐさび（姫君ノ）
しさをまひに。あけくれのしづさぐさをさん
きなれ罪して。せふくんことの心ぐるしかれば此文（源ノ）
などもこえまちくつかはす。女（紫）君もいまはしくに
思じきそし給はずうしくしき人（姫君）につゝゆるし
罪しぬへり。こし（源卅一夕）もくりぬ。うらくかなり（地）兎に。せふ
しとなき此（源）事様に。いとぐめでたく。こがさあくため

それよりこそひま。春りつゞひ始めて。人のかくなしさ（舞踏之事を定）
ほどのは。七日よろこびなどしまふ。ひきつれ（のイ 正月ノ白馬 初日より十日までのうちく）（踏歌見才ちくと定）
おくり。うやくちうはなとあるくさちよげなり
えしえりうつきくの人も心のうちはおもふく
まや。おんうべはゆえりくまこゆかよろほひあり
くひくしの院の孫のれくも。若き所えこの（東院ノ西のこふ之）（こい）（花ちる里）
ちう。おうまほし さき所ま。さる人くるう
わべのすゞれなどうちとけず。心づひしつゐて
諸ま。うえきもうし いそまなくて。のどうあれいと（係り）
まれひまなど まは。かとえひわくりなどし
のべど。ゑうらちとあるりなどやするわざとえくし

ゝ面のぎ。こぐれ（あちらくす）こゝろざ面のおひしかまこめさて。
かぢりのすくをなりけり身ましてあしめと。ぞひ
なしつゝありがたきまでうきしろやすく。のどかり
抱しぬへばおりふしのれ（ほノ）こゝろをさてなども。こ（恋）
なるのれありさ面ま。おとりけぢめこまなりし頃
まてなしまふて。おれづりきゝゆべうハあしもぞ。
かなじぐと人を来りつゝうまつりて。べたうどもく
ことなくこゝぎ。中しこゝぐれこゝ家ところなく。
めやすきれ有様なり。山里（源心）のつれ（大井ノ子）ぐともこゝぎに
ぼしやれば。おほやけもこゝくしまれさんがしこゝ稲
まぐして。いたり給とて。つゆよりことまうちけさう

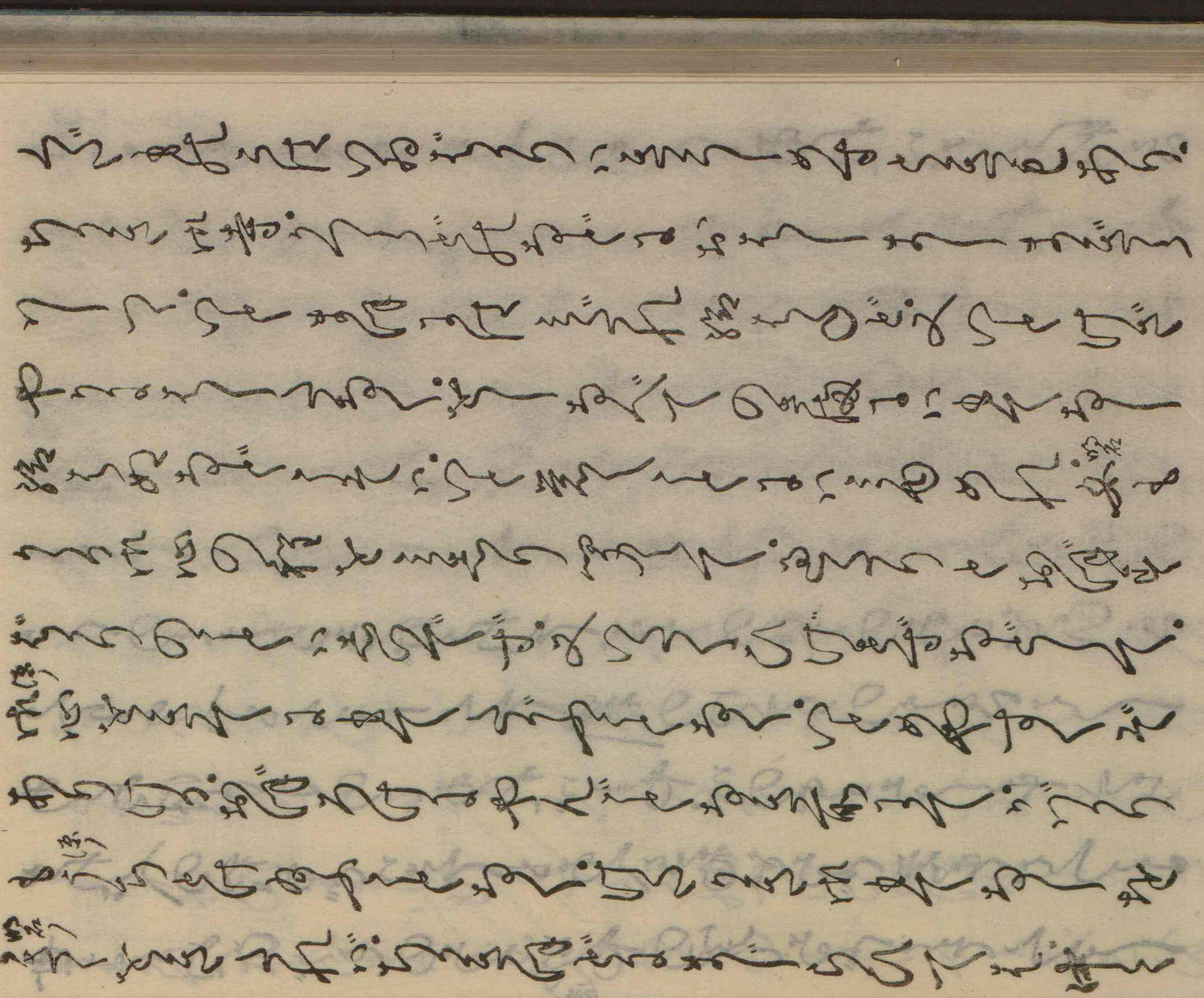
志給て。さくらのれなをしまえなるぬれぞひき
うきねて。うきしめさうぞきぬて。まゐり申ぬふ
さ風。く風なきや月日に。いとゞ志くさくらまえぬ候。
女（笠ハ）君こゞなしずこまりをくりぬふ。姫君をいたけ
なく。れさしぬきのすそまうらもて。志くひきて
給ほどに。（篭ノ命へもこ）どにもいでぬひぬべ。それが（深ん）ふちとまりて。
いとあれとおぼしたりこらへ（をき）ゑて。あすうへり
こんとくらずさひていで給ほ（笠）ゐるどのくらゐ給
うけて。（笠ノ女ぐうこ）中将のきこしてきえぬへり
（笠）舟とむかをちうるべのなくはそあすうへ
こんせなとゝまちこめ。（中将）いうちなれてきゐれが。（深）いと

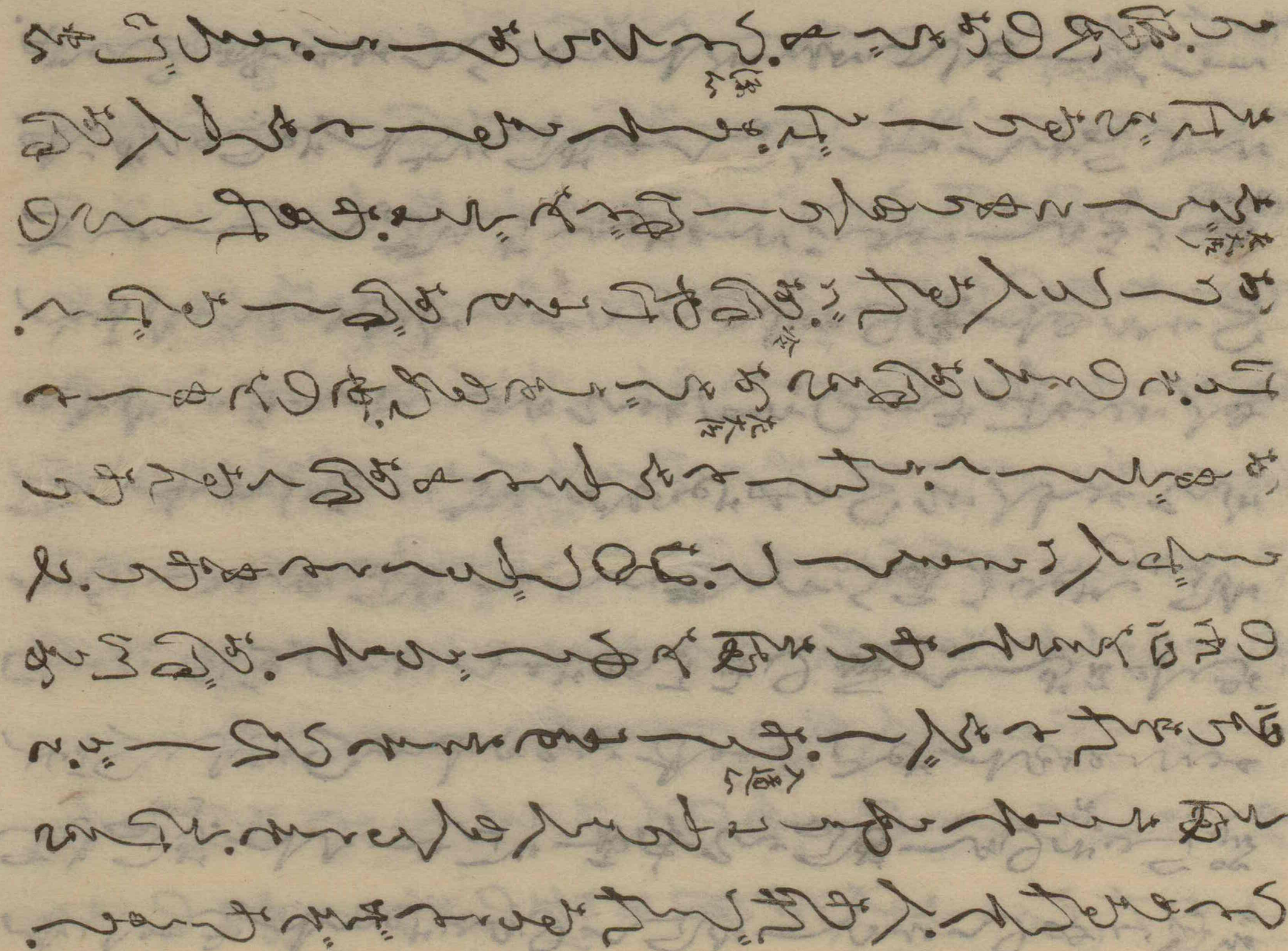




いかなむひをみすしんと我まていいうじう恋しかり
ぬべきさ夜をとうち夜まりつゝ姫君をゆとゝろまいれてう
けうしげちりれちをくめ給ひつゝさまふれぬぬる
れさ夜こゝ前ぬりお前(まへ)なりんぐいなぐかなぐ
くれいでやなどかくしひあへり。大井にて源ハ うしこまはいと
のざやかに心ぐもありけもひにすゝなして。家の
ゑ猪もやうしるれてめづしきまこづ(吟ヵ)のいかひ
などはこうさびごとにやむごとなき人ごとにを
とりけぢめこよなりしぐ。かくちよういあしまは
しうねびまさりもしさしよりつゝのあぼえにりさ
まざれさしばさうさづひなくやもとせうべと云。

せまくぬひがものなる。おや（入道）の男しなどこそくるし
それ。人の程などいさてもあべき物をなど言せ。ちつる
あるぬほどこのこあれば（ニヲ）や。心のどうなしぞこち
くりぬふもくるしくて。髮のつくりのうきもくし
くとのこうちなげられて。さうの琴のあるをひき
よきて。かれあるしまてさ取ふけうりしねも。例の
あぼしいでくるれば。びさをつりなくきめこまへば。
すくしうきあつきこる。いつ（深ん）でうのこひきまくべし
けんとあぼさる。つ（姫君）君のれことなど。こ由やうなる
まゐひつくおもす。こ（地）てもうかなところなれど。や
うこうちさまりぬふおりくあれば。ちうれき





ことをしゆづりきこえてこそ。いとまも有りけるを。
こころぼそくことしげくもあぼされて。なげきおり。
帝(ミカド)は(疫)れとしよりはこゝまちうおされくしうね
びさをなて。世のまつりごともうしろめたく思ひ
なべきはあらぬ。どもまるとりこそくれうしろこ
しるまゝべきひともなきをこれにゆづりてかは
しげりなりれほいもかれたんとあぼしたり。いと
あるぎ口おしく。後のれいぎなどにも。れ子どもむ
まごにまるてなん。こまやかなとふらひあつかひ思ひ
給けるそ(池)のとしあほかる世中さはがしくて。あぼ(門裏)やけ
ぎ後にものゝさとししげくのどうなんでおまつ也

まもれいまふぐへ月日星(ほし)の光えし雲のくく
ぎまひありとのこ世の人おどろくことおほくて
こちくのうんぐへ文どもなれるまもあやしう
世まちまべてちまぬことぐもまぐまたり。うち(涼ん)れ
かさぐのこちんれこころのうちるまげ(冷ノ事)しくお
ぼしきしることありけり。入(左つぎ)ほきいの文。去乃
始よりちやこいつしをぬて。三月まハいとをなく
ちまをまひぬれば。(冷)叶華などあり。院(桐つぎ所)は別(まれ)なしを
まひしほどはいといたけなくて。地ゆくもおぼ
されざりしをいこじうおぼしなげきたれ氣を
なれば。(左つぎん)文もいとうなしくおぼしめさる。(詞)ことしハ

かなしぎのがうまじきとし（此七ハ女ノつてきむ年ん）とおもふ事へつれど。
おどろくしきこゝちまも侍らざりつれば。命の
うぎりきりがほに侍らんも。人やうてことく
しうおもたんとはぐうりてなん。をどくのこと
なども。ぐぎとれいよりも。さりつきてしも侍らず
ありにけり。来りて心のどうに。君の此物語もなすぐ
おもひ事へなぐらぐ。何しざ夜ちかありすくなく
侍て。ぐちおしういぶきくてすぎ侍ぬうこと。いと
よはげに罪も給。此七まぞおりしましけり。されど
いとつくさりにおりしまきさま紙。（冷ん）おしくかれ
しとこましき給。（詞）つくしまきをぬべきれとしなりに。

あれぐしくで月ばかりを友ござまばなげき
わかり給ふつまだ川しるべなきもつみよりも
こゝろまよはせ給ハざりけることいふばかりなし
めでたかりけるこのごろぞかなしさ。ぶらびのこと
きよせのよ、月ばかりハつれのはるけさのこゝろさ
ゆくへかりつゝ涙のおもひもなくおぼしけり
うりうね冷しあれば、ほどちかく人をまつかも。
あらしきこえおぼかり家いとくらしこそくらく
たつ袖も涙にぬれ給はずなれ心のうちにおぼしけれ
らうらうじきすがたを世の人もおなじ人かすかに
かのうちにおもはざりしとも人にまかりけるを

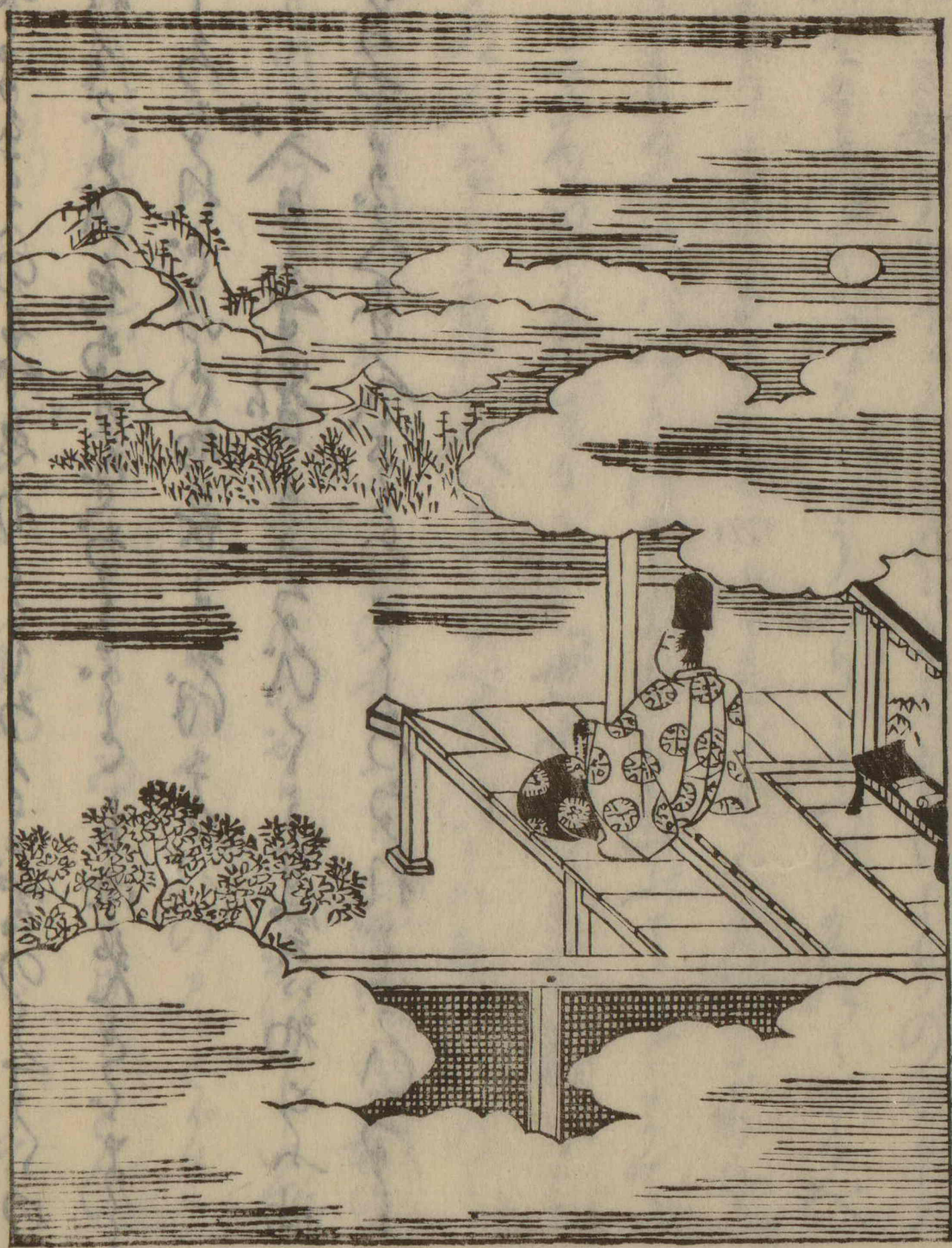
おぼしわづらふ人の身の中よりいづることの心（冷ハ涼ノ字なるべし）
とをくをかくしぬをさへすがる心がらしうらみもせ
ずそれのみぞうきものをしむねはいはれぬこと
まおぼしやるべき心ちし給けり。おさむ（涼ム）しもおぼ
やけがてに歯まてもうくやんごとなき人のうつり
かづらきうを給なんこそ人しれずなげく。
人しれぬ哀りて恨（うつり）なくて此わりなく（いの）おぼしうらみ
（若ハ密通ノ事）こゝろしづ代おぼしえりつすがへ今一
夜深くぞなりぬらがうしくおぼされがらき
此ま性の像るうて（若ハ）此ありま歯などもうんべき
人ぐるゝ（涼ノ）ひとへのへげ・まへしとうぶりまかせて

れいほん人も罪をやるを給ふぎ給ふ事いとゞ
などかうしも心よくさき事ほと人めをぬぼし
人をどいかゝ人よりもの此ありさ事を太かるの世
まつけてもおそしくおしき人の此有様を
心まかるふつぎなるもどかけさぐめきたんかる
なくいふひなくぬぼさくこと很（うぎり）なしさかぐ（詞）
しかぬ力なぐらもむしより此うきろまつう
まつるべきことを心のいろかぎりハどろかなすぐず
たひまつるおほきおさぐのかれこまひぬるを
ぶる世中こころあそこしくしまん人らるゝ又
くおりしまをばよろづまころそぐれ行りて世る

ゆゑんことも。のうりあきゆちあんし行とまさて
給はどるとも（放つ不）しぞなどのまえいりやうまてまて給
ぬれバ。いふ（添ん）ひなくうるしまことをなげしなげく。
（地）うしこき此身の程と罪のゆゑ中にも。此心（苦ブジノ）ぞんなどの。
世のこゝろもあまたくあそれにおりしましてかう
けることよきて。人のうれへとあることなどもなどの
づくうちまじ子をいさくかもさやうなること志
こゞれなく。人のつうまつることをも。世のくらし
ひとをべきことをばとゞめのふ。そどくの方とても。
すじりにようなて。いりぬしうぬげくしうぬ
なふ人など。じうしのさうしませにもこれをけりを。

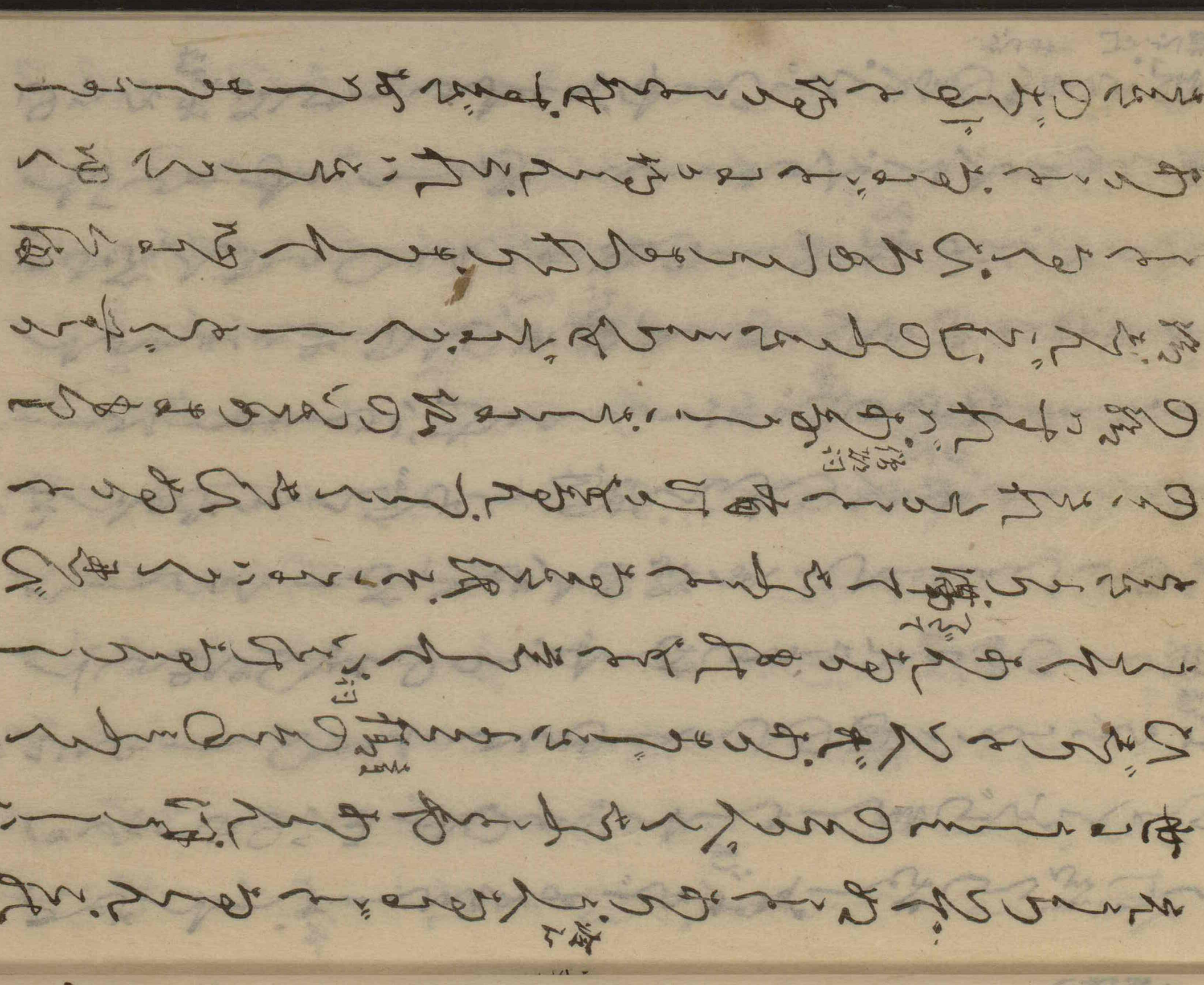
これはさやうなることなく、こゝにまとまりのこゝろ
まれえぬべきのりきかうぶりのまれくさるべ
きかぎりしてまことる心ふかきことぐまれかぎりを、
しをきをぬへれバほとゝまじき山ぶしなどまぞ
おしこゝのもおさゝんなりなも世中ひぐきてかなしと
ちゝぬ人なし。我ぞ人などなべてひとろ色にくろこ
ゝろてものゝとへなきまの言なり二深院の此前の
様をぬくんじても家のしんのおりなどおぼしいづ。
しとしぢりゝとひとりごちぬて、人の見とがゝん
のべきれバ此ねんぞぐうまゝもりぬぬて、目ゝとひ
なさくしこまふ此のひもれやかりさして。

やまぶきのまぶ色あらそなりに雲のうすくけて
わりがよび色なりをおなじとも此光とぶまゝぬ
ころなれどいと物哀におぼさり
入日さす峯(こね)にくなびくうす雲は物さふ袖に
いろやまがへ家へさらぬさらなれどうひなし



れ(ニ若フイノ)ぐるどもとさて、ことにもしづまりて、ぞ(淦)うど地心
ぼそく見しかり、此入(若フイ)の家の此母ぞさ紀の此世よ
里つるとりて、れいのりの師まてさふらひけれ
僧都(そうづ)故家(若フイ)にもいとやんごとなくしたる人
見しかりしを、(淦)おほやけにもをもされおぼしまて、
いかしき(ごぐん)れ軍どもおほくこそ、世にりし
ときひぢりありけり、(僧都ノ)とし七十(あまそぢ)ばかりまて、今(とり)は終の
をこなひをきんとてこもりたるが、(若フイ)えやの此ことに
よりていでたるを、(淦)うちより見しおりてづゐる
さふらはせ給、この此は私もとのごとくありさふら
そらべきよし、(淦)おとぐもすくめのあへば、(僧都詞)ぴまはよあ

ちどいとこへがうちぬぼし侍れど。おほをごとく乃
うしこゝまよりぶりきれ心ざしをそへてとて
きつふまぜげうるうあらけきてり。人もちくさ
ふしもぜおるはまぞちどしぬる程まぶぶいる
うちもしぶきつゝ世中のことぜそうしぬふつゐ
てまいと（詞）そうしがくそてぶりていつゝまもや
まりあくんとむぬへちどうゝとおほかれど。
もろしめされぬまつゝをもくて。天（そ）のまなこおそ
ろしくせふぬへうゝしとをこゝろまむとび侍けく。
いのちをとり侍なばなるのやくは侍ん。仏も心
ぶくなしとや。そしめさんとどうりぞうしさして。



院（柏不作門）・さきいの家・ぞいま世をまつりごち給・おとゞの
此ことめぞべて・ぐりてよりしぬことまやもりいで
給ふん・ぐり老法（おひ）しの身にいことひうれへ給ふ
ともおまのくひ給ふん・佛天（ぶつてん）のつげあるによりて
そうし給ふりつ（冷）ぐ云ひしまれおりしましうし
ときより・右（右つぐ）家のつくおぼしまげことありて此
いのりつうまつ・を給ゆへなん給しくちしく
法しの心にえさとり給ふぞことのぞひめありて・
おとゞよこさ面のつうまあうりさまひしとき・
いよくとぢ定しめして・ぐきのて此いのりとぞも
うけ給ひり給しをおとゞもさうしめしてなん

又さらなくくらへ御をられて此冷ゑらぬり
つきおりしましまでづうまつりことぐも侍し
そのけ之面りりし様とてくりしくそうすりを
冷ん
ぎりしめすまおきましうめづらかまでおそろしう
もうましうもさ面ぐまれこころこぐれかり とぐ
了れいへもなけれバ僧都すゑそうしけるを
びんなくあげしめすやと ワづらりしうせひて
やとらりこまりてまづりとめ冷しとぐめて心汨り
しくですぎなましかバ後の世までのとぐ先あるべ
りけりことを今までしのびこめられるけかな
なんぐへりてうしろめたき心なりとしひぬり又は

ことをしりて。もしつゝみかゝぬぐひやあらんと
のゝ夜ゝ守。さしうりなまぐしと王命婦（ぶ）とより
ほかれ人ごのことの氣色ゝゝろ人侍らず。さうまよりか
んいとおそろしう侍。天皇んなどもきりまさと
し。世中しづかなるぬハ此けるりいときなく。ものゝ心
しろしめすまじかりつゝ程しそ侍つれ。やうく此
よそひさりおもしましてゝ。なまごとも。けきまへ
さをぬべきとれまいたりて。とがをもしめしなり。
よろづのことおやの此世よりもじまうまこそ侍
なれ。何のつゝとも。しろしめさぬがおそろしきま
よりしさまへけちてしことをさしまゝろよりも

いづし侍りぬることなくおなじ心のほどなり。おけ
こそぬれバまたぞめ。ちんじんハゆめみやうまいらじき
ことをきこしめして、家にハ忍しのばれさせ給ふ故院
のおほむしろめく、おさなのうく人り
てせまつりまつりも良よくてげけるまほけか
こともうぐおぼしやすそ。ひまがまでいで
きをうまうけるのげうくもんと見えので。おさなもおどろ
きて来りまへる後けんずりまつけてもいでんた
志のびぐくおぼしめされて、御消のこぼれさせ給
ぬると。おほうく古家のれこともひらうすおぼし
めしまうしろちるれバちあめりと。こまりうまうそ。その日

桃園ノ
或人のみこゝろをなひぬあやしくそうすゝまゝく（治ん）
いま世中のさはがしきことをなげきあはし
こりかゝるこゝろあれば・おとゞハはゞかりもえまうさで
治らで何ともおもひあなるあやかるゝれまれ紙乃
つゐてま世ハつきぬるゝやあらん・まれころばそく
術あるまじぬ心ちあるんするを・ゐあれさそもうくのどか
あるまじぬまほろげあはさしくあん古家のおぼさむ
云ひもそこそ世乃のこともぞひさくかきつれ・
いまは心やすさ海まてもすぐ海ほしくあんと
くゝひ男治・いとおかまじされことあり世代
きづかあるまじぬことなかるまじずまつりごとのあくとくゆ

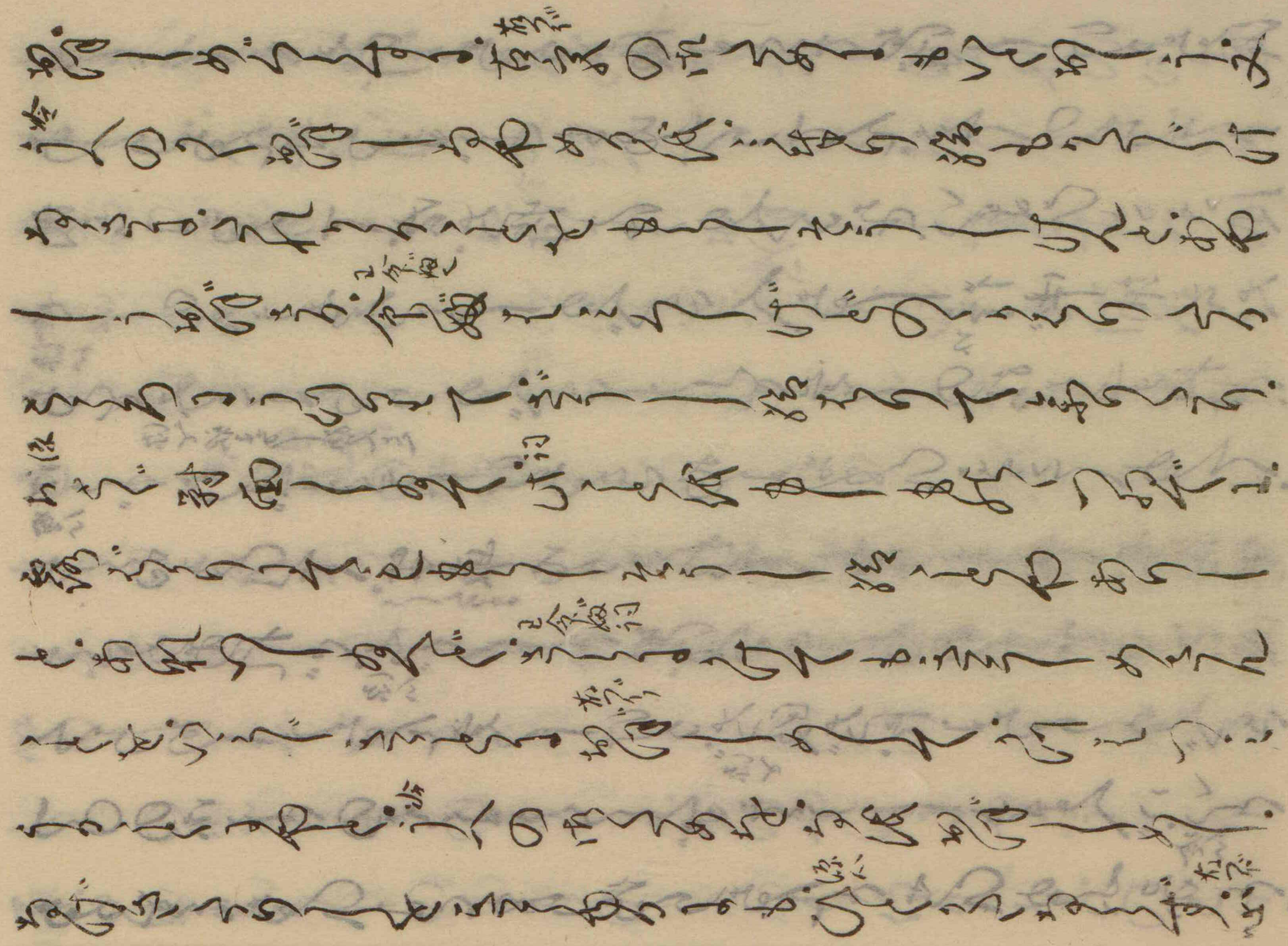
がめうまもよるも侍しぞ。さうしき世ましもなん。
よろしぬことだも侍けるひぢりのこうどの世にも。
よこさ海のこぐれいでくらこと。もろうしにも侍(さぶら)
けり。我くまくもさるん侍。ましてことりのよそひ
どもの時いたりぬるをあげしたまげくべきことにも
侍しぞなどすべて。あ用くのことだもを男し給(地)
もしまほぶもいとくたちしいうしや。つねよりも
くろきれよそひにやつしぬへうれうち。女がふ
ところなし。冷(冷)へもそしばれかどんにもあげしよう
ことなれど。さくしめたてことのちは。又こ海うに
こまりのひ川ぞまことにいとどあそれにあげし

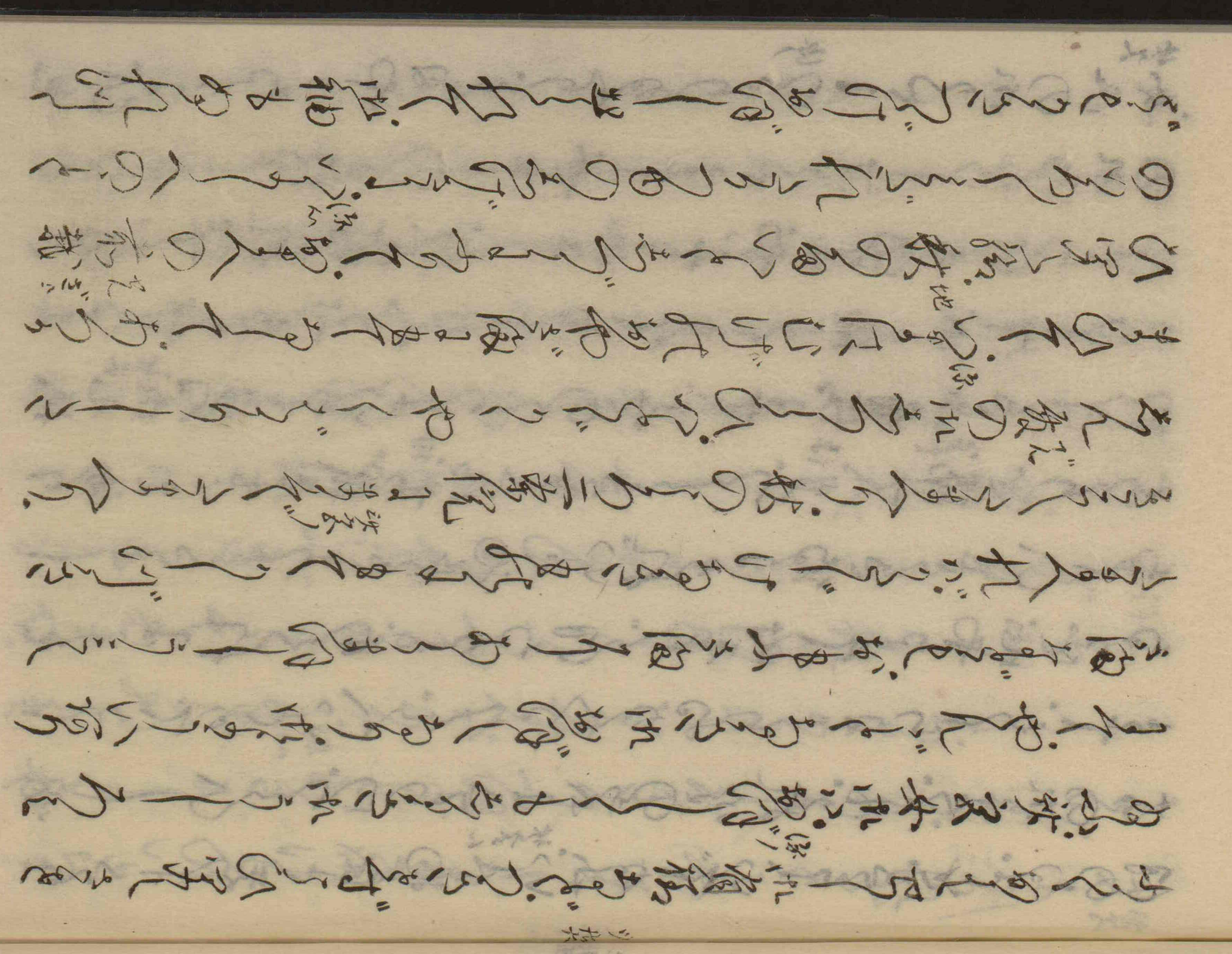
めさられバいでこのことをみすめさしえたやと
おぼせど・さすがまたしたるくもおぼしぬべきと
なれバ・つきれこちるつくましく・ふともえうち
いで罪しぬるぬほどハ・こゝおぼうるのことゞもを・
つゐしりことまなつしう罪しさせ給・うちうしこ
まりぬへるさ雨まていとれ気色ことなりを・うし(深ん)
こき人のれぬれ・おやしとこまりこまへどいと
くさゞくと・こゝろしめしこんとは・おぼさゞ
つまり・こ(冷)へハ・王命婦(まうしやうぶ)てりくしきこと・さハま
ほしうえしめせど・いまさしらましゝ遣び給ん
ことしりまやりと・かれ人まもおもれじ・こゝ

なさばよいぞ目のめくしとひきてて、さきぐ
かうことの例もありけんやと、きんとぞおぼゆ
ど、さしるつゐでもなければ、いなく此学宮（がくもん）をを
させ給ひて、さ面ぐにあるどもを此らんずるに、
もろこしにはあらもれても、志のびても、えぐりがは
志さしといと御得りなり。日本（いのりと）には、さしるに此らん
じうり取なし、ことひあらんにてもかやうに思び
さらんことをばいかでかくへしなやうのあらん
とする。一世（ひせ）の源氏（ぐんじ）、又納言（ゑぶんざいしん）、大臣に成て後にさしる
人にもなり、位にもつきぬへるもおまたの例あり
なり。人がらのかしこさなることをまて、さもやゆづり

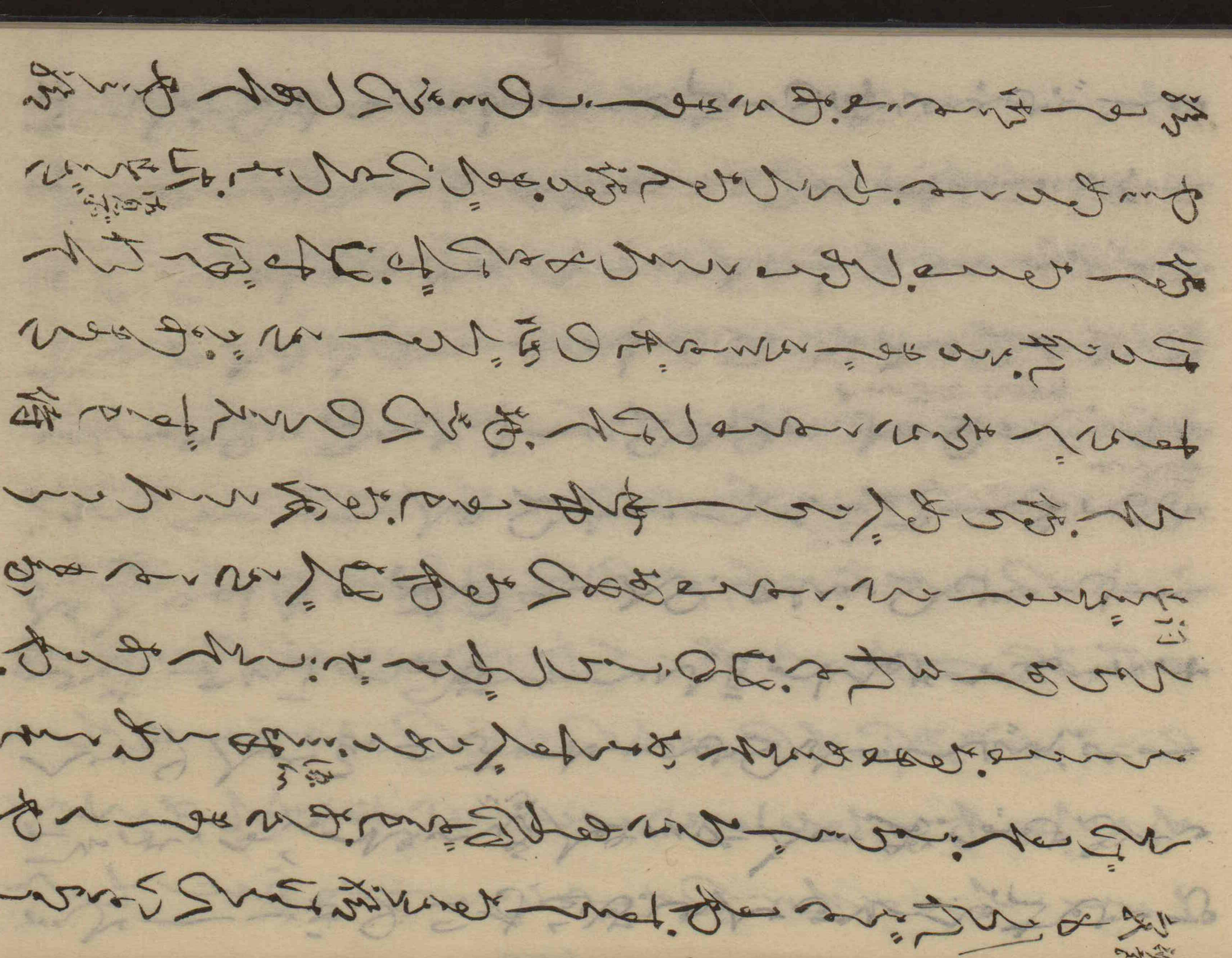
ふそしましなどよろづまぞ見しけり秋の川うさ
めしまだ波だにも奴給べきことうちくまさぐめ
中給ついでまちん。みなどおぼしよするすぢの
ことまもしきこゝ給けりを。おさぐいとまばゆく
おそろしう見して。さしまあるまじきよしを申
通し給。右院の御心ざし。おまるのこと。遊の御中に
とりつきて見しめしなるべし。位をゆづらを給いん
ことを見しめしよしぶなりまりなまりその御
心あらこめて。をよばぬきたまはのぼり給ふん。こゝ
もとの御をきてのまゝに。おほやけにつうまり
て。かはをこしのよそひかさなり給りしなば。のどり

ちりをこなひまこまりぬりちんとせひぬふふと。
つるのはことのちまかちしぞそうしこまへばいと（冷心）
くちおしうるん覚しけり。大政（涼と）だにまちりぬべき
さぶめあれど。志ぢし（涼心）とぬぼすちらありて。こゝにれ
らゝねそひて。牛車（うしくるま）ゆりされて来りまりで志語を。
れ（冷心）りどあらずうゝじけるき物まおもひさこしぬて。
るをみこまちりぬべきよしを覚しの語もすれど。
世中（涼心）のれうしろうしぬべき人なし。得（以）中納言だ
納言まちりて。冷だ将かけぬへるを。いまひとさは
あぐりちんまちまごともゆづりてん。さてのちはり
ともくもしげりちりさ夜まとぞ思ぼしけり。ち夜

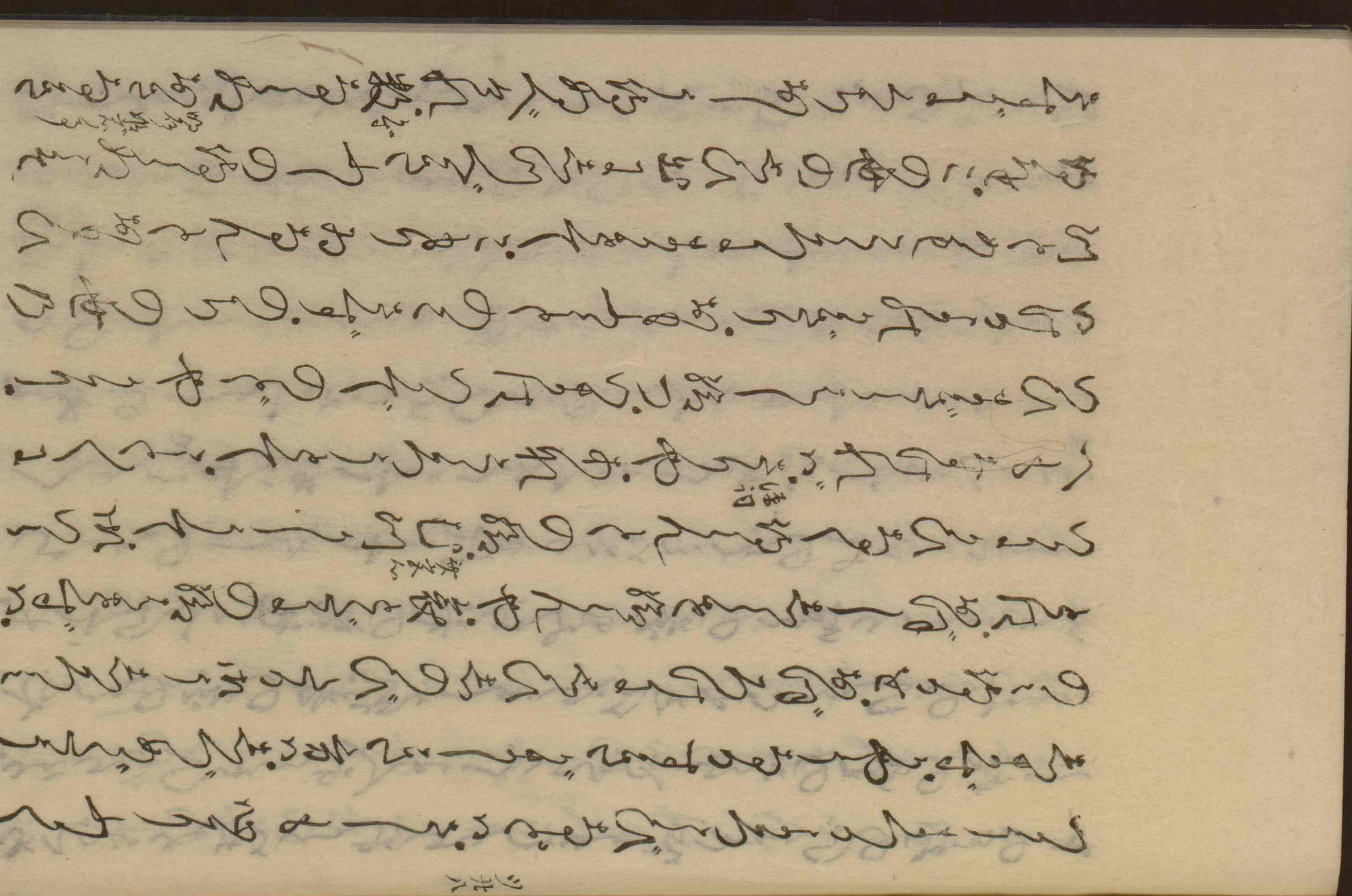




女(秋文)はのれるまはつらりぬへりこ海やうちるまび色
のれるをしすぐるまて世中のさはがしきるど
ことつけのひてやがて(ミ)れきうぢんなれバずひさ
うくしてれさ海よくもてなしぬへるつきをずなま
めしきれ有信まて三寸のうちまいるまぬれ(秋文)九根
ぐらりを(つぶそ)隔て(源)身づくしきこそ給(伺)前(ば)載どもこそ御り
なくひもときなるれいと地をきまじきこし
なるを心やまて時たりがなるもおもれまこそ
とてもしらるよりぬぬへるなどへいとめでこし
芳のれことでもかれ姫のまはこちつづくひし明
月のなどをきそしいでぬふ(秋文ん)いと地長と云しこり



ましがなかる世のうれりしとふしとおもひぬへれ
しをかうまでも川かうまつりぬしんぎしるしを
なんなぐさめさふぬへなきど。もえしそふりのむを
ぼれぬひれんはなぼいぶきうしそおぬへらるれ
とて。いまひとつそのぬひさしつ。なるぼこのなきて
（秋夜二人かけ給るすん）
（ゆかりなす）
おつこ侍し程。かくぐまおもひぬへしことかくハ
しづかなひまたり。ひんぐしの院に抱する人（花ちる）志。
そこちとなくて。心ぐるしうおぼしつたり侍り
しも。そぐしうおもひなりまて侍り。心ぢ人のよく
かしぬなど。我も人もこぬ人（あさ）ぬらめて。いとこそさは
やかなれ。かくしちかへり。おほやけのれうしちこ



ひとつれ侍らば、ひとつれのとまりどころとなりや、うらうげ
なくともなき後ばかりひろげさをかくひそ侍らずなり
なん侍るまゝぐずまへさきのあるじこゝえのふ流（禅ノ家）
いへいへとなりとなげて海まうりけしてひと
こげりうみすあめへるけるひびとなりしげ嵐。
謀ノなくつまで、おあくとなりますおいらす、ぢらか
しきうくれのぞこいきうまれまそ、そしのうち
ゆうしうけはくの花もみぢ、色の紅葉まつけても、
こゝろのもりくとも志侍りしぐれ、芸の花のこゝや
し、秋の空のさうりとぞうぐまへおもへひ侍りけり、
そのこゝろのげまと心うりがしうりおもへいなりさうぐめ

こそ侍らざんなれ。もろうしは妻の姿のましき
まじくもれなしとのひたべかりやまとことのしは。
秋のあそれをとりこそ母の人なかいづれも時くは
つけてこのつまめうつりて。えこそ姿とりの女をも
ねをもつさまへ侍らん。せざきうきの内なりとを。
そのおりくの心こしなざり。妻の姿のまをも
うへつくし。秋の草をもゆりうつしていたづらなる
堂邊の出をもすまきて。人まれんぜさをんと
ち給ふなをいづるまかれ心よを侍べうんとまうて
あまいと（秋ぐさん）里にしてこそとあばをど。むげまえて
れいへこそして給はざらんもうしてあれば。初まりして

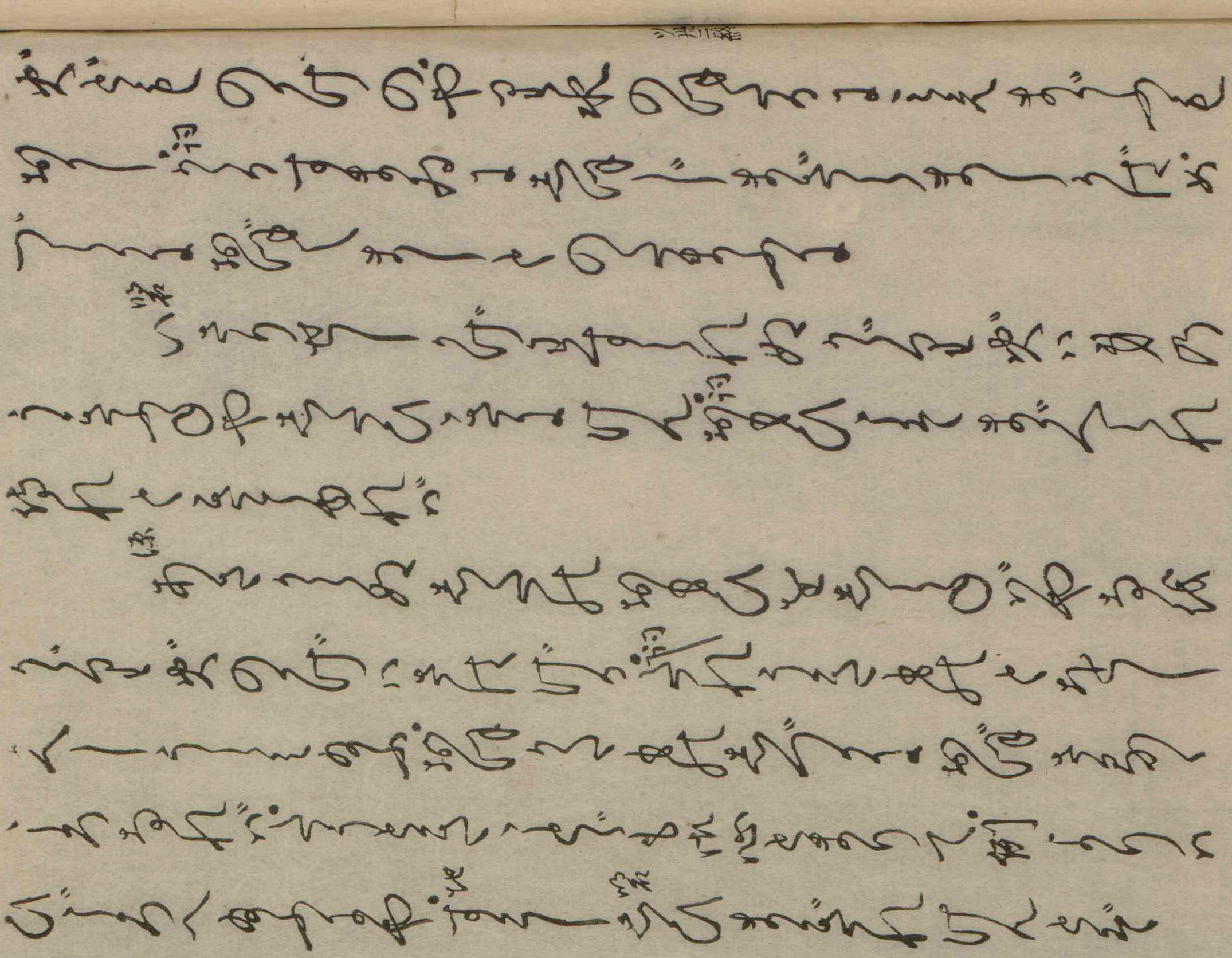
いかにせひつきはらんげまいつとちまきあるまあや
しとさくしゆふべこそ。ちうあうさくし（寛平ノ事）給まし
露のよすがまも。せうまへられぬべかれと。しどけ
なげまのあひかけも。（源ん）いとらうたげなるまえしのび
給ふで
（源）さきもさは衣をかきを人しれず我身ましむ
家私のゆふぐ。しのびがたきありくも給りしと
笑し給ふ。いづ（秋宮ノ）このれいくへかはあらん。こころえずと
ぬぼしたる御乳色なり。（池）このつのでに。（源ノ）えうめあるべ
うしこ笑しあふとぐもあるべし。いますうしひ
ことも志給ひべかれぞ。いとうそ（秋宮ノ）とぬぼいたるも

(ほ)こゝろのハづれ心をハなくさでかしうらなどと
おぼしくへしてうちなげきのへるさ波なれ。まれ
かくしなまめかしきも。心づき（秋好ん）なうぞおぼしなり
ゆかやかしづひさしう給めかきしこともあられ。おさ（保司）
ましうものとものを給ぬかれ。まことまことかうさ
人いかくしそおぼしざんなれ。よしつまよりまくまを
ねぶるまづしんとてハかりかぬかうちまめかも
られまほひとまりくるさん。（秋好ん）うらやましくおぼさるか。
人づとうしなど事ありて（人々ハ）この此事どものうつう
おぼひしぬまれ。いでくさるまあかめやハ
あまたかくにさるをうられ有様なりし。ゆかしと

はしあへり。(源紫)なぬいまはいりぬて。どこにもいり給ひぞ
いこうちながめて。しらしらしかしぬへり。こうろと
をくかけて。ちらくんぐさふらもをなて。抽代ちど
をさを給。(源ん)うあれがちなることは。むすみふるがな
くをのぶを有けるよと。ゆが身ちながらぬばしまふる。
これはいとまげなきことも。おそろしうつゝふるさ
うこは。ぬほうまさりけめど。いかしへのすきはいひ
やなすくちなさほどのあやまちは。仏神もゆるし
のひけんとぬばしさ両すも。ぬ代ひ(好きノ事)こちはうまろ
やすく。ふうさうこれまさりけるれとぬばしまふ
を給。(秋文ん)女れを秋のあそれをしるをがほうり。いとん

ちうしけるもくやしうちづしと。れ心ひとりは
物はちうしうるやまりしげまさへきなふをいとすく
よりまつれなくて。つ○よりもあやがりわりさなふ。
弟(諸付)君(訣名)に。弟れの私に心をとゝをなりしも衰に。君(笠)乃
善の明ぼのに心をめぬへるもことりまこそあれ。
時につけうる事者のられまよきても。れこうる
とまるだらりのあそびなどしてきがるに。あほやけ
ひとりれいとなるきしげさんこそふさりしかし○。
いでせるしてしがるとこゝれ(笠ノ)こ見さうぐ
しくやとせこそ。心ぐるしそれなどくらひさて
なふ。山(源公)星の人(昭君)もいうまなどくらずあぼしやれど。

ところをさのこまさりれこまして。大井一 ゆくり給ことゝいと
うたし。世中をあぢきなくうしとさひきり気色。など
うきしもさふべき心やすくこちいでゝ。おほぞうの
すまねいきじとおもへるを。おほけなしといおほせ
まれからいとおしくそれいのあぐんのれ念佛ま
ことづけて大井一 ゆくりぬへり。ずこ[illegible]あるくまゝに。いと心
すゞけなる所のさ由に。いとあくらぎしんことま
てぐに。衰そひぬべし。[illegible]まして[illegible]まつけても。
つゝりけりれちぎりの。さすがにあさかしぬを
せふに。なりくしてなぐさめぐるさ気色まれば。
[illegible]ちへかるまふ。いとそしげきあるかりかぐり



69038
6APT8

1